

# 「初等教育実習事前事後指導」の授業内容の検討 —子どもの視点から考える指導計画案作成を中心に—

三宅 一恵\*・兒子 千鶴子\*・湯澤 美紀\*

Instructional Lectures on Kindergarten Teaching Practice : Creating a  
Guidance Plan from the Children's Point of View

Kazue MIYAKE, Chizuko NIGO and Miki YUZAWA

This report proposes effective instructional lectures on kindergarten teaching practice, with the aim of enabling students to write a guidance plan from the children's point of view. First, the report summarizes the outlines and aims of the lectures. Then, it explains the contents of the lectures. The lectures consist of four workshops and three activities based on creating a guidance plan. Students are supposed to cooperate with each other in a group. Finally, the effectiveness of these lectures is discussed based on the students' experiences and the guidance plans written by them.

Keywords : kindergarten teaching practice, guidance plans, the children's point of view

## はじめに

### 目的

本稿では、幼稚園課程で3年次に実施している「初等教育実習事前事後指導」において、特に、「子どもの視点から考える指導計画案作成」に焦点をあて、その授業実践の省察を行い、今後の授業計画の改善を目指すことを目的とする。

「初等教育実習事前事後指導」の授業は、3年生の通年科目（前期・後期）として、毎年10月頃、4週間通して行われる幼稚園教育実習（以下、実習という）を事前と事後で補完する授業である。特に、事前の授業については、教育実習における学生によ

る保育実践の礎となるべく、幼児理解を踏まえた指導案作成が主な学びの一つとなる。

本学で使用している指導計画案の形式（以下、指導案という）は、図1の通り、上部に基本情報（子どもの年齢・組名・人数・日にち・天気）「幼児の姿」「指導のねらい・内容」を配置し、下部に、時系列的に「時刻」「環境・準備」「幼児の活動」「指導上の留意点」を配置している。本授業に関して、授業担当者間でこれまで繰り返し検討してきたことは、学生がまだ出会っていない幼児の姿をいかに想像しながら、指導案を作成しうるかといったことであった。

そこで、本年度は、指導案作成の授業の導入として、学生が、子どもの視点をもつ

キーワード：幼稚園教育実習、指導計画案、子どもの視点

※ 本学人間生活学部児童学科

2018年度 初等教育実習事前事後指導 (a)		学生番号 ( ) 氏名 ( )			
全日実習指導案		年保育	歳児	組 (男児 ( ) 名 女児 ( ) 名 計 ( ) 名)	
検印	10月 日 曜日 天候 ( )	幼児の姿		ねらい内容	
時刻	環境・準備	幼児の活動	指導上の留意点		

図1 本授業で用いている指導計画例

こと、つまり、子どもが何を感じ、何に興味・関心を抱くかを、自らの体験を通して考えていくために、絵本という身近な素材を手がかりとした。

栗岡(2017)は、「学生は指導計画案(以下、指導案とする)を作成することに苦手意識をもっており、実際に作成することが苦手である」と指摘している。指導案作成が学生自身も実習に取り組む上での大きな不安要素となっていることは、第一筆者が現役の幼稚園教師として幼稚園現場で教育実習を受けた学生の様子からも容易に想像できる。

指導案の書き方の指導方法についての研究は多くあるが、林(2018)は、学生が指導案作成に関して、何を難しいと感じているかを調査している。結果、「保育指導案は保育者自身の保育に対する思いを具現化するものである」とし、「難しさを軽減することをめざすのではなく(中略)新たな課題を抱えながら、子どもにとらえ方、子どもに対する願い、教材に対する思い等をじっくりと考え、整理しながら指導案を作成する、つまり、自分のめざす保育を熟考

していく過程そのものが保育者として育っていくうえで最も大事である」と述べている。このことについては、まさに学生指導の真髄と言え、これから保育者を目指そうとする学生にとって、保育者の資質として最も身に付けてほしい姿勢である。本授業においても、そのことを念頭において、授業展開を考えることとした。

そこで、授業では、絵本をきっかけに、具体的な活動の計画を進めるうえで、活動そのもの、また、そこで用いる教材への探究を重視した。そうした教材研究を踏まえ、活動の全体像を、数回の授業にわたり、学生同士が繰り返し語り合い、保育に対する思いを具体化したうえで、指導案を作成することとした。つまり、指導案を書くことを目的化した授業ではなく、活動そのものを考えた結果として、指導案が生み出されるといったプロセスの再現を本授業では目指した。なお、具体的な授業の進め方については、以下の点を配慮した。

「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課

程の質保証を考える一」には、幼稚園教員として新たな課題に対応できる力が求められていることを指摘しており、「教員一人一人がカリキュラム・マネジメントに参画していくことなどの新たな課題に対応できる力量をつけることが求められている」と述べるとともに、養成段階に求められることとして、「一貫した理念に基づいてその資質能力の向上を図り、長期的かつ総合的な視野をもって養成にあたる必要がある」としている。

実践力の育成を目指す授業においても、能動的な学修への参加を取り入れたアクティブ・ラーニングの手法を多く取り入れ、学生が主体的に動き・考えていけるような機会の創出やワークシートの工夫を行った。

### 保育経験を重ねるカリキュラム編成

保育者をめざす学生は、大学での講義のみならず、保育現場でも多くの学びを得る。本学の実習は、2年次の後期に「保育実習Ⅰ（保育所）」、3年次前期に「保育実習Ⅰ（施設）」、3年次後期の「幼稚園教育実習」、4年次前期の「保育実習Ⅱ・Ⅲ」がある。

実習以外にも、1,2年次の「教育・保育基礎実習ⅠⅡ」、3,4年次の「インターンシップⅠⅡ」の授業においては、ボランティア・インターンシップが科目として設けられており、多くの学生が1年次から、保育現場で子どもと向き合う経験を重ねている。実施後には、子どもとの日々の出会いや遊びを通じた気付きや学びをポートフォリオにまとめ、4年間蓄積している。このポートフォリオは、本学教職支援センターの相談員（保育経験者）や大学の担当教員が内容を読み、アドバイスを記入して学生へ返す、というやり取りが適宜行われている。ポートフォリオを作成することで、学生自身が振り返りを行う機会となっている。

特に、3年次の実習においては、1,2年

次の「教育・保育基礎実習ⅠⅡ」、2年次の後期に「保育実習Ⅰ（保育所）」での子どもたちの実態を学んでいることを踏まえ、過去の体験の想起を適宜促し、それ以前の体験との融合を促していった。

### 授業科目ならびに本研究対象授業の概要

#### シラバス

##### （授業の概要）

教育実習の目的や内容を明らかにし、実践に必要な心構え、教材研究、指導計画案作成、学級経営、指導技術等について、具体例を通して学ぶ。

##### （到達目標）

教師の役割について認識を深め、教育実習に関する専門的な知識や技術を習得する。

##### （授業一覧）

#### 事前指導

##### I オリエンテーション

- 1～2 教育実習の概要と準備について
- 3 教育者の目指すべき姿
- 4～5 教育実習の心構えと教師の服務

##### II 教育実習の実務練習

- 6～8 実習記録の書き方ⅠⅡⅢ
- 9～10 観察実習、模擬当番活動ほか
- 11～12 参加実習、模擬保育ほか

##### III 教育実習の直前準備

- 13～14 教育実習体験談（4年生から）・直前打ち合わせ
- 15 実習校園オリエンテーション

※事後指導については省略する。

### 教科書

本稿で扱う「初等教育実習事前事後指導」の授業では、「幼稚園教育実習の手引き」を作成し、この手引きに従って指導を行っている。手引きの冒頭、「この手引きの役割は、『みなさんに自らの学びを支援する』ことです」と明記されている。その

ため、実習に関する事務的な内容だけではなく、幼稚園教育実習に向け、学生の自らの学びを促すヒントが記されている。

手引きは4章から構成されており、第1章「1.教材研究」では、教材研究の三つのポイントとして、「子どもを理解する」「本物に五感で触れる」「子どもたちの豊かな体験について考える」が記されている。「2.絵本の読み聞かせ」の項目では、実習中に必ず扱うであろう絵本について、子どもに与える際の選書の大切さを述べている。「3.造形あそび」「4.環境構成」と続き、第2章で「教育実習の概要」、第3章「私の実習」、第4章「よく受ける質問」となっている。

第3章の「1.部分指導：双眼鏡作り」には、先輩が幼稚園教育実習中に作成した指導案の1頁が掲載されている。また、その活動を計画に至るまでの経緯も記されている。つまり、指導案は、子どもの生活とともにあること、また、子どもの関心に応じて柔軟に作成されるべきことが示されており、本授業実践とも重なる内容である。

### 「子どもの視点で考える」とは

ボランティアに行き始めたばかりの学生のポートフォリオには、「(子どもに)～してもらった」といった表現が多用されている。加えて、保育者の意図と反する行動を示す子どもに出会った際、どのように接したらよいか、戸惑う様子も記述される。いずれも、大人の期待した行為を子どもが行ったか、否かといった基準が学生の内にあると推測される。これは、ややもすると、大人の目線から子どもを観るものとなり、子どもの内面に触れること、ひいては子どもの視点から物事をとらえることを妨げることになろう。したがって、大学の様々な授業を通して、「子どもの視点で考える」といった視点の切り替えを促していく必要

がある。

友定(2011)は、「子どもの視点に立つと言うとき重要なことは、子どもが『主体であること』を侵さないということではないか」と述べている。子どもの視点に立つことは、まさに子どもの主体性を尊重することであり、指導案作成においても、特に、留意すべきことがらである。

そこで、以下に示す対象授業においても、学生が活動を構想する際、その活動が、子どもの主体性をいかに引き出すかといった点を意識するよう学生に指導を行った。

### 対象授業の概要

研究対象授業は、シラバスに記載している「Ⅱ教育実習の実務練習」6～12回である。

本学には附属幼稚園が併設されており、ボランティア、インターンシップ等でたびたび訪れているが、この授業では観察実習2回、遊び実習2回を計画し、附属幼稚園で実習を行っている。実習後には、観察記録を記入し、子どものエピソードとその考察を行うことで、実習を振り返る機会となっている。また、幼稚園の実習先が決定した後、その園で事前に参加実習を1回行い、その後、担任の先生の「指導の記録」を記入し提出する。これらも幼児理解を目的としたものであり、各実習前の授業内のオリエンテーションにおいて、子どもの視点をもつことを、実習の目的として適宜示している。

対象授業では、無作為に作成した6人を一つのグループとし(全12グループ)、グループごとに一つのテーマを題材に、指導案作成ならびに模擬保育を行うこととした。6人で協同的な作業を重ねることは、活動を具体的に構想する上で、多様なアイデアを共有できること、加えて、自分の考えを、遠慮することなく他者に伝えたり、

相手の考えを尊重し、受け入れたりするといったコミュニケーションは、保育者として求められる資質の一つであると考えたからである。

演習については4回、模擬保育を各グループで3回行った。

各演習では、次のことを目的とした。演習1においては、絵本の読み聞かせを通して、子どもの視点を得ること、演習2においては、活動の題材について話し合い、アイデアを得ていくこと、演習3においては、活動の流れを意識したより具体的な活動を構想することである。なお、演習4において、第2筆者による模擬保育を観ることで、保育の展開を知り、指導計画で記すべき要点を学ぶことを目的とした。

演習1～3においては、話し合いはグループ内で行うものの、提出するワークシートは、個人の発想をもとに書くことを求めた。それは、自らの力でアイデアを創出することや、書くことに関して、着実に自信をつけてほしいという願いによる。

模擬保育では、次のことを目的とした。通常、模擬保育は、先生役は一人であり、発表は1回のみである。しかし、教育実習に行った際、全ての学生は先生の役を担う。そのため、保育の実践力を培う上でも、全ての学生が模擬保育においても先生役を担う必要があると考えた(模擬保育1)。また、全体を通した発表において、自らのグループの模擬保育に対して、第3者より有益なコメントを得るが(模擬保育2)、改善していく機会が欲しい。そこで、3回目の模擬保育では、全回の反省を踏まえ、よりよい保育のあり方を検討し、実践することを目的とする。

1回目は、グループ内での模擬保育であり、全ての学生が先生の役を担う。毎回、学生の実態を考慮しながら、次回の計画を吟味して立案するというをくり返し

行った。ただし、そこでの話し合いの時間は、当日の授業内容によって適宜割り当てられた。場合によっては、30分程度しか割けられない回もあったが、継続的に同じグループで話し合いを進める機会を持った。

## 授業展開

### 演習1：子どもの気持ちで絵本を読もう

20冊程度の絵本を精選して用意し、グループごとにその中から1冊の絵本を選び、代表者が読み手となり、読み聞かせを行うこととした。授業の前半、子どもがいかにか絵本の「絵を読んでいるか」といったことについて『ちいさなねこ』(福音館書店)をもとに、ワークショップを行った。子どもは絵本を見るときに、文字は追わず絵をじっくりと見ていること、読む側は、子どもの反応を見ながらゆっくりと読むことなどを伝えた。

その後、子どもの視点で作成された、子どもが読んでもらって嬉しい本として担当教員らが20冊を厳選し、学生は各グループ1冊を選び、グループ内で読み聞かせを行った。読み聞かせを行う人以外のメンバーは、読んでもらっている子どもの気持ちで、絵本を見るように伝えた。絵本を読んだ後、率直な感想をグループ内で語り合った。

次に、子どもだったら「次にどんな遊びをするかな?」といった問いかけを行い、再び、グループ内で語りあった。

### 次回授業への課題

グループ内での語りを踏まえ、絵本を子どもの視点からみた際の感想や、遊びの展開に関する問いに関して、ワークシートに記入することを課題とした(巻末資料図2参照)。ただし、その際、グループのまとめではなく、自らの考えを記入するように求めた。

なお、ワークシートは、なるべく容易な



表現で問うこととし、学生が資料に抵抗感なく、取り組みやすくなるよう配慮した。

#### 演習2：保育のアイデアの種を見つけよう

個々で作成した資料をもとに、今度はグループでまとめ、どのように保育にとり入れていくのがよいかを相談する時間をとった。話し合った内容をさらに個人の資料にまとめ、どう幼児の活動をすすめるとよいか、幼児の活動の流れまでを記入するように促した。

#### 次回授業への課題

次なる授業への課題は、グループ内での話し合いを踏まえ、絵本を子どもの視点からみた際の感想や、遊びの展開に関する問いに関して、ワークシートに記入することを課題とした(巻末資料図3参照)。ただし、その際、グループのまとめではなく、自らの考えを記入するように求めた。

#### 演習3：具体的な遊びの姿を描き出そう

指導案を考える上での要点を、ワークシートをもとに話し合った(巻末資料図4参照)。ただし、「ねらい」「内容」といった表現は避け、今回の遊びの焦点に絞った、具体的な学びや育ちを書くよう求めた。林は「指導案指導においては、やはり「ねらい」「内容」がまさに基本的な原理の中核となる部分」であり、「子どもの実態が目前にない学生が「ねらい」「内容」を考えることが指導案作成指導の鍵となる」と述べている。筆者自身も教育実習生のみならず、現場の保育者も、指導案を作成する際の「ねらい」「内容」を書く難しさを実感している。幼児の実態が見えにくい学生たちに、どこまで実態を理解させ、指導案作成につながるのか、ということが課題である。

その他に、教師の配慮を記入するために「どんな配慮が必要ですか？」という項目、さらに「幼児の姿」を考えられるきっかけ

となるように、「子どもはどんな姿を見せるか」「どんな姿を見せてほしいか」について記入する欄を設けた。

#### 次回授業への課題

時間内に終わらなかったグループは、ワークシートを全て記入するように求めた。

#### 演習4：部分指導のイメージをつかもう

グループで作成した資料をもとに、グループごとに、全員の前で口頭発表を行った(巻末資料図5)。

その後、1～4の演習を行うと同時に、筆者らが作成した「絵本の読み聞かせ」と「わらべうたの集団遊び」の指導案を配付し、手引きと合わせて、部分実習指導案の記入方法について、詳しく説明を行った。指導案に取り上げた絵本については、子どもがどう絵本を見ているか、絵をスクリーンに映し出ししながら、1ページずつ解説を行った。また、保育経験者である第2筆者が、2つの指導案について、学生の前で模擬保育を行った。

#### 次なる授業への課題

ここで、模擬保育に向けた具体的な枠組みを提示した。新たなテーマとしては、3歳児：歌、楽器遊び、4歳児：リズム表現、5歳児：集団遊びの3種類とし、実習に行く10月に行う活動を、各4グループずつ取り組むこととした。そのため、模擬保育に向けて、それ以前の話し合いと先ほどのテーマとを整合させながら、より具体的な子どもの姿をもとにした活動を落とし込み、模擬保育を実施することを課題とした。

#### 模擬保育1：私の保育

12のグループに分かれ、同時並行的に、グループ内で自ら計画した指導案をもとに模擬保育を行った。6人グループ内で、交替して先生役となり、他の学生を子ども役として模擬保育を行った。そして、模擬保

育を振り返り、子どもとして主体的にその活動を行うことができたか等、省察を行った。

### 次なる授業への課題

グループで6人全ての指導案を照らし合わせ、結果、グループとしての1つの活動を決め、その遊びの展開をより具体的に考えるとともに、指導案を作成することを課題とした。

### 模擬保育2：私たちの保育1

指導案をもとに、模擬保育を行った。4つのグループに分かれ、同時並行で模擬保育を行った。他のグループから、模擬保育の内容についてコメントが出され、それらを踏まえ、自らのグループの省察を行った。

### 次なる授業への課題

実践を省察し、教材研究を深め、また、子どもの主体性を引き出す活動展開となるよう、模擬保育案の改善を行い、指導案を作成することが課題となった。

### 模擬保育3：私たちの保育2

指導案をもとに、模擬保育を行った。前回とは異なる3つのグループに分かれ、同時並行で模擬保育を行った。他のグループから、模擬保育の内容についてコメントが出され、それらを踏まえ、自らのグループの省察を行った。

### 授業内容ならびに考察

最終的に、各絵本を読んだグループの活動内容は、表1の通りであった。以下、各演習・各模擬保育での学生の姿や授業内容をもとに、振り返りを行った。

表1 各グループで読んだ本と遊びのアイデア

	本の題名	遊び
1	『しのだけむらのやぶがっこう』	七夕飾りをつくる
2	『はくはぞうだ』	ぞうになりきって遊ぶ

3	『ぞうくんのさんぽ』	じゃんけん列車
4	『ぐりとぐら』	ホットケーキ作り
5	『ふわふわふとん』	ふわふわ素材を使って遊ぶ
6	『3びきのやぎのらがらどん』	ボール遊び
7	『しげみむらおいしむら』	おみせやさんごっこ
8	『てぶくろ』	手袋をつくって遊ぶ
9	『ゆかいなかえる』	絵本の絵を描く
10	『ラチとらいおん』	らいおんの体操をする
11	『やさいのおなか』	スタンプ絵本をつくる
12	『ねことおんどり』	絵を描く

### 演習1（子どもの気持ちで絵本を読もう）:

ワークシートには、子どもの視点でいかに絵本を堪能したか、その痕跡が残されていた。例えば、学生が選んだ絵本の中でも、『ふわふわふとん』（カズコ・G・ストーン）は、やなぎむらの小さな虫たちの冬籠りの一場面を描いたものであるが、学生は、「虫の目線で描かれていたので、同じ景色でも自分たちが見る景色と違って新鮮だった」「草木のカサカサなる音や、水や風の冷たさ、ガガイモのわたのふわふわ感が伝わってきた」「苦勞して運んだガガイモがはじける瞬間、思わず「わー」と言ってしまった」といったように、五感を研ぎ澄ませ、また、子どもの感動そのままに、絵本を楽しんでいる様子が伝わってきた。加えて、「あんなふわふわふとんで寝てみたい」といった、子どもの思いを代弁するかのような記述も見られ、この演習により、学生の視点の切り替えを促したことが示唆された。

また、絵本からの発展させる遊びの案のアイデアユニットは、最少5つから最多14と、複数が出されていた。内容は「食育」「自然とのかかわり」「行事」「鬼遊び」「リ

ズム遊び」「歌」「体操」「劇遊び」「絵画製作」  
というように、実に5領域にわたっていた。

例えば、『ふわふわふとん』の読み聞かせグループ（以下、『ふわふわふとん』のグループ）では、「ガガイモの種を探しに行く」「絵本に登場した虫を探しに行く」「ふわふわした素材に触れたり、それを使った製作を行う」「ガガイモの種を段ボールで作って、遊ぶ」といったように、探索活動から製作、また、見立遊びに至るまで、子どもの「遊びたい気持ち」を代弁するかのよう幅広い活動の提案が行われていた。

#### 演習2（保育のアイデアの種を見つけよう）:

各自が保育のアイデアを持ち寄り、活動の流れを検討した。『ふわふわふとん』のグループでは、「ダンボール箱をガガイモの種に見立てて遊ぶ」活動を選び、その保育の流れを考えた。

『ふわふわふとん』を読んだその後の活動では、ダンボール箱で絵本に登場するガガイモを作り、中にふわふわ感を感じられる材料を詰めて遊ぶ活動を取り上げていた。この遊びを通して育てたいものとして、「自分の思い通りの物を作ることで思考力、想像力が育つ」「ふわふわな素材を見つける」「友達と一緒に遊ぶことの楽しさを味わう」「製作をする中で、物の貸し借りをする」などを考え、また、この活動をしているときの子どもの姿として、「様々な素材の感触を楽しんでる」「友達と言葉でやり取りをしながら協力して製作している」「絵本の場面を再現するように考えている」「登場人物になりきって遊んでいる」などの姿が考えられていた。その際、角ばった段ボールでガガイモをどのように作るのか考える必要性を示唆した。子どもは、より本物らしいものを製作したいと思うこととしての助言であった。

#### 演習3（具体的な遊びの姿を描き出そう）:

前回の話し合いの中で得た反省を生かし

た活動案について話し合いが行われた。ここからゆるやかに、保育者として、いかに活動を展開するかといった視点を組み込んでいった。

『ふわふわふとん』のグループは、段ボール箱に工夫を凝らし、よりガガイモらしくしようとする記述が見られた。

ただし、学生に出されたアイデアのうち、幼児の発達段階にそぐわないものもあり、適宜、アドバイスをを行った。また、4つのグループが演習2と3から大きくテーマを変えた。

#### 演習4（部分指導のイメージをつかもう）:

この活動を通して、子どものどのような面が育ちうるのか、各グループは、話し合いを重ねていき、次第に、より具体的な子どもの姿を思い描くようになっていった。

『ふわふわふとん』のグループは、「段ボールをガガイモに見立てて、ふわふわ素材を使って遊ぶ」という遊びのイメージを構成しており、この遊びを通して、「友達との関わりを深めたい」との願いを抱いていった。また、活動の内容は、4歳児の子どもの育ちに適しているとし、具体的に子どもの育ちの姿を思い描くようになっていった。

#### 模擬保育1（私の保育）:

新たなテーマに対し、それぞれに活動の流れを構想した。一人ずつが先生役となり、6人で6通りの展開で、模擬保育を行った。この模擬保育では、残りのメンバーが子どもになり、その年齢の子どもなら、どのように振る舞うのかといった視点も課題とした。この模擬保育では、子ども役の学生は、具体的な指導内容を知らないまま活動に参加した。先生役をした感想の中に、「子どもたちの発言や気持ちを汲み取り、生かしながら活動をしていくことが大切だと感じた」といった様に、活動中の子どもの心の動きを意識した反省も多くみられた。一方、子ども役の感想には、「先生にたくさ



ん話しかけたくなくなった」「先生が楽しそうにしていると、自然と笑顔になって安心して活動できた」「子ども役になり、こんな時はこういうことをする子どもがいるかもしれない、と子ども目線の考え方ができると思った」など、模擬保育の子ども役を行うことで、改めて子どもの目線から活動をみることができていた。笑顔や笑い声が絶えなかったことから、今まで演習を重ねてきたグループメンバー同士、心を開き本音で話し合える仲間として取り組んだことが伺えた。先生、子どもの両方の立場を素直に実感し学びにつながったのではないかと考える。

#### 模擬保育2（私たちの保育Ⅰ）：

すべてのグループが、それぞれのテーマにもとづいた模擬保育を行った。ここでは、3歳児の楽器遊びをテーマに、6人が出したアイデアの種から、歌「むしのこえ」の楽器遊びを模擬保育したグループを取り上げる。

作成した指導案では、「ねらい・内容」として、「一人一人が楽しんで楽器に親しむ」「様々な楽器の特徴を知る」「様々な楽器に触れ、様々な楽器を鳴らす」とあり、この活動が3歳児に適した活動かどうかは別として、「幼児の活動」との関連性を意識して作成していることが伺えた。また、指導上の留意点として、「楽器を選ぶときは、子どもの意見を聞きながら、納得のいく楽器選びができるようにする」など、6つの留意点をあげていた。

模擬保育後、先生役の学生の反省として、「進めることに精一杯になり、子ども全員の意見やちょっとした言いあいなどを聞き取って会話にすることができなかった」「楽器の特徴をうまく伝えることができず、音を鳴らしただけでどの楽器にするか、保育者が決めてしまったので、もっと楽器に興味をもてるような声掛けが必要だった」と

あった。子ども役の感想として「もう少し、子どもの口から意見がでるような感じにしても良かった」「もっとみんなで相談して、子ども役の意見を取り入れるような流れにすればよかったと思った」など、子どもの主体的な活動を保育者が支えていく際、どういった関わりが必要かといった点について、学生自身の気づきが多くみられていた。一方で、「どのグループでも、先生が幼児のいろいろな気付きや言葉を大切にして活動に取り入れようとする様子が見られた。応答的なやりとりやみんなが笑顔で活動することが、楽しい経験や今後の興味・関心につながるので大切にしたいと思った」という意見もあり、他のグループの保育を見て、学ぶものも大きかったようである。

#### 模擬保育3（私たちの保育Ⅱ）：

模擬保育2の反省をもとに、グループごとに準備を重ね、実践する姿が見られた。ねらい、内容の変更はなかったが、指導案に示された指導上の留意点は、多くのグループで増え、「もう一度したいという声があれば、もう一度行うようにして、幼児が満足できるようにする」「他の虫になりたいと思うので、やってみたい楽器を選ぶように…」といった、子どもの主体性を伸ばすための配慮がより多く示されるようになった。

#### 今後の課題

これらの実践を通して、次のような課題が明らかになった。

(1) この授業形態については、今年度、初めての取組であり、毎回学生の反応をみながら演習・模擬保育を積み重ねていった。例えば、模擬保育3は、全体の前で、代表のグループに行ってもらう予定であった。しかし、模擬保育2を行った際、個別グループ内での発表から、複数のグループの前での発表となり、緊張した面があった

のか、学生の力が十分に発揮できなかったようであった。そのため、全グループ、再度指導案の見直しを行ったうえで、模擬保育3を行うように、進め方の変更を行った。結果、全体で同じ内容を共有することができなかった。模擬保育2・3のあり方については、課題が残った。

(2) 模擬保育を行った際、学生が子ども役になって初めて、子どもの視点で保育を考えたという感想が多く見られた。このことは、様々な授業の中で、繰り返し伝えてきたことであったが、学生自身がそのことに自ら気づいていく工夫は今後とも重ねていく必要がある。

(3) 本授業では、小グループでのアクティブ・ラーニングに基づいて進めたが、グループでの活動に重点をおくと、学生一人一人が自分の力を出し惜しむ姿が見られ、グループと個の作業の両立を目指すことの難しさを実感する場面があった。集団内で意見を伝え合い、また、橋梁する中での学びと、個の学びの両立を引き続きの課題とした。

本実践を通して、学生は、子どもの視点と保育者としての視点に基づきながら、子どもが主体的に関われる活動や遊びのアイデアを創出していった。それは、単に教材研究を行うこととも異なる。

今後、学生は、教育実習の中で子どもと出会い、改めて「子どもの視点に立つ」こ

との意味を、繰り返し自己に問うことになる。学生の中にその視点が根付いていくためにも、事後の授業のもつ意味もまた大きい。実習後、学生が自らの実践の省察に基づきながら、改めて子どもの視点を得ていけるような、事後の授業における手立てを工夫していきたい。

## 引用文献

- 1) 林理恵 (2018) 「短期大学保育学生の保育指導案作成に関する考察—幼稚園実習での学びに着目して—」 幼年教育 WEB ジャーナル第1号, 13-20
- 2) 一般社会法人保育教諭養成課程研究会 (2017) 「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—」 文部科学省 HP  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1385790.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm)
- 3) 栗岡洋美 (2017) 「指導案作成のメソッド—段階的指導のあり方—」 中京学院 中京短期大学部研究紀要 第47巻第1号, 21-30
- 4) ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科 (2018) 「幼稚園教育実習の手引き—2018—」
- 5) 友定啓子 (2011) 「子どもの視点に立つということ」 幼児の教育 第110巻4号, 13-16

**実践演習** 絵本の読み聞かせをしてみよう！

学籍番号 \_\_\_\_\_ 名前 \_\_\_\_\_

○読んだ絵本『 \_\_\_\_\_ 』

作者名 \_\_\_\_\_ 出版社名 \_\_\_\_\_

○読んだ（読んでもらった）感想

○この絵本をつかって、遊びへ活かしていこう！  
どんなことができるかな？自分なりに考えてみよう。

図2 演習1で用いたワークシート

**実践演習2** 保育の展開を考えてみよう！【絵本を遊びへ活かそう！】

学籍番号 \_\_\_\_\_ 名前 \_\_\_\_\_

○読んだ絵本『 \_\_\_\_\_ 』

・どんな遊び？

・その遊びには、子どもにとって、どんな学びや育ちがあるでしょうか。

・保育の流れを考えてみよう。

（幼児の活動）

①絵本を見る。

②

③

図3 演習2で用いたワークシート

## ★ 指導案へ生かしていきましょう

**実践演習 3** 保育の展開を考えてみよう！【絵本を遊びへ活かそう！】

○その日の遊びを具体的に書きましょう。

・何歳児に適した遊びですか？

★「幼児の活動」欄に○で示します。

歳児

○今回の遊びに焦点を絞って、具体的な学びや育ちを書いてみましょう。

★ 指導案の「わらい・内容」を考えるときの参考になります。  
わらいと内容の書き方については、別資料を参考にしましょう。

環境図・準備物	活動の流れ	どんな配慮が必要ですか？
★「環境・準備」欄へ	★「幼児の活動」欄へ	★「指導上の留意点」の欄へ

○子どもはどんな姿（表情・ことば・動きなど）を見せるか、想像して書いてみましょう。

★予想した幼児の姿から、配慮すべきことを考えて「指導上の留意点」に書き込みます。

○あなたは、どんな姿（表情・ことば・動きなど）を見せてほしいと願いますか？

★「教師の願い」の欄があればこの姿をもとに考えます。「指導上の留意点」にもつながります。

図4 演習3で用いたワークシート



**実践演習 4** 保育の展開を考えたことを、みんなに伝えよう！

○読んだ絵本『』

○グループメンバー

○その日の遊びを具体的に書きましょう。

○その遊びに適した季節（月）はいつ頃がいいでしょう？それはなぜですか？

○何歳児に適した遊びでしょうか？それはなぜですか？

○その遊びには、その年齢の子どもにとってどんな学びや育ちがあるのでしょうか。

○子どもはどんな姿（表情・ことば・動きなど）を見せるか、想像して書いてみましょう。

○あなたは、どんな姿（表情・ことば・動きなど）を見せてほしいと願いますか？

図5 演習4で用いたワークシート